日本中國學會報　第74集
2022年10月８日　発行　抜刷

学界展望（語学）

秋谷　裕幸
橋本　貴子
宮島　和也
楊　安娜
塩山　正純
加納　希美
濱田　武志
小川　典子

そのほか真下厚・遠藤耕太郎・波照間永吉編『東アジアの歌と文字』（勉誠出版、アジア遊学 254）は、アジアの少数民族の古歌と琉球の『おもろさうし』などとの対照研究を試みた 9 名の共著書。Edoardo Gerlini と河野貴美子の共編『古典は遺産か？：日本文学におけるテクスト遺産の利用と再創造』（勉誠出版、アジア遊学 261）は、日本伝統社会において「古典」とされるものが尊崇され、そして次の世代に遺産として伝承されてゆくことに着目した斬新な企画。共著者 18 名。ただし中国古典籍についての言及がやや少ない気もする。

ところで我が国伝承の数ある旧鈔本の中でも『文選集注』残巻群は、まさに天壌の孤本として名高いが、この図版を収めた『唐鈔文選集注彙存』（上海古籍出版社、初版は 2000、増補第 2 版は 2011）が今年再び第 3 版として再刊された。今回増補された資料は残念ながら無かったが、旧版では人為的ミスで文字が欠損していた部分（第 2 版の第 1 冊 32 頁の頭注「音之力反」、同 728 頁の右下「政」、第 3 冊 277 頁の右上「為」）が差し替えられた。またこの『文選集注』などを最初に影印した『京都帝国大学文学部景印旧鈔本叢書』（全 10 集線装 36 冊、1922 ～ 1942）の全図版も、天津古籍出版社より 12 冊の洋装本で出版された。もう一つ、陳才智編『白居易資料新編』（中国社会科学出版社）も刊行された。全 10 冊 6777 頁の巨編で、元稹ら白居易の同時代人から近代の銭鍾書の言説までを収め、陳友琴『白居易資料彙編』（初刊は『白居易詩評述彙編』1958）の面目を大きく一新した。新編も唐・宋・元・明・清、そして近代と中国の歴史軸で資料を配列するが、その中に円仁や島田忠臣、都良香、藤原佐世、また那波道円や市河寛斎、さらには崔致遠、李奎報など日本や朝鮮半島の著作も豊富に紹介されている。ところがなぜか菅原道真の項が見つからず、福岡で白居易を研究してきた筆者静永としては、自らの情報発信不足を深く反省するところである。

最後に、現存最古の古琴の楽譜を読み解いた山寺美紀子『国宝『碣石調幽蘭第五』の研究』（北海道大学出版会、2012）が中国語訳された。徐樑・陶熠訳『碣石調幽蘭第五之研究』（重慶出版社）。日本の優れた研究成果が、精確な翻訳によって海外の研究者に読まれることはまことに慶ばしい。（静永　健）

◉語　学

はじめに

学界展望（語学）は、日本中国語学会・学界展望編集委員会（委員長・秋谷裕幸）が担当する。

従前どおり、本稿も原則として 2021 年 1 月から 12 月までに日本国内で公刊された著書および学術論文を対象とするとともに、重要な研究成果については海外で公刊された成果にも言及する。

研究分野の分類および執筆者は以下の通り：「音韻」（橋本貴子・公立小松大学）、「文字・訓詁」（宮島和也・成蹊大学）、「文法・語彙（上中古）」（楊安娜・北海学園大学）、

「文法・語彙（近代）」（塩山正純・愛知大学）、「文法・語彙（現代）」（加納希美・金沢大学）、「方言」（濱田武志・神戸市外国語大学）、「教育」（小川典子・愛知大学）。文字・訓詁、文法・語彙（上中古）、文法・語彙（近代）、教育については執筆者が昨年度から交代した。「はじめに」及び全体の調整は秋谷裕幸（愛媛大学）が担当した。

文中で用いた学術誌の略号は以下の通り。いずれも 2021 年に出版されたものである。

『東京』　　『東京大学中国語中国文学研究室紀要』24 号

『中教』　　『中国語教育』第 19 号（中国語教育学会）　　（秋谷裕幸）

一、音韻

まず中古音について。古屋昭弘「字音の変遷について」（金文京編『漢字を使った文化はどう広がっていたのか：東アジアの漢字漢文文化圏』文学通信）は日本・朝鮮・越南の漢字音についての概説である。主に中古音との対応関係、そして各漢字音の歴史的変遷について体系的に説明する。それらの漢字音には中古音と対応しないものが一部見られるが、そのうち中古音より古い段階の反映とされる字音についても紹介する。太田斎「蒸職韻、幽韻における重紐の痕跡」（『神戸外大論叢』73(3)；改訂版『KOTONOHA』223）は幽韻を重紐韻と見なす立場から、『切韻』系韻書における幽韻の重紐対立（『広韻』では合併）と反切用字上の混乱を取り上げ、同様の事例が見られる職韻の状況にも論及した上で詳細な考察を行う。改訂版ではさらに詳しい説明が追加されており、こちらを読むほうが太田氏の主張を十分に理解できる。丁鋒「大蔵音義叢考」（『語学教育フォーラム』35）は氏の仏典音義に関する研究 4 篇を集成した大作である。うち 2 篇は慧苑音義に関する文献学的・音韻学的研究であり、残り 2 篇は宋代に刊行された福州版大蔵経の随函音義に関するものである。第 3 篇の「《福州藏》随函音義五種注音研究（直音篇）」では一部の直音に唐宋期に生じた音韻変化の反映が見られることを指摘する。橋本貴子「対音資料から見た唐代の軽唇音化について：附論日母の脱鼻音化」（『神戸外大論叢』73(3)）は初唐期における軽唇音化の進行状況について、梵漢対音や新出の漢訳マニ教文献の音訳讃歌といった対音資料を活用して検討する。それら対音資料では非母や奉母が外国語の v や f に対応しており、非母や奉母は遅くとも初唐末期までには軽唇音化がある程度進行していたと考えられる。また漢訳マニ教文献の音訳讃歌に日母の摩擦音化を示す例が見られることから、日母は唐代長安音の体系的な脱鼻音化とは無関係に脱鼻音化していた可能性があることを指摘する。

音韻学的研究ではないが、李乃琦『一切経音義古写本の研究』（汲古書院）も挙げておきたい。本書は玄応音義の日本古写本を用いた文献学的研究であり、漢語史研究や仏典音義研究にとっては第 1 章「一切経音義についての先行研究」、第 2 章「一切経音義の系統分類」および第 5 章「一切経音義の敦煌・吐魯蕃断片群」が特に重要である。

近世音は例年同様、対音資料を活用した研究が多い。吉池孝一・中村雅之「漢語近世音と契丹文字漢字音(9)～(14)」（『KOTONOHA』217、220 ～ 224）は止摂歯音の拗音性の消失した時期について契丹文字資料を用いて検討する。北宋の邵雍（1011-1077）『皇極経世声音唱和図』では止摂精・荘組が直音と同様に扱われているが、止摂章組は

拗音性を保っていた。そこで止摂章組における拗音性消失の時期が問題となる。本連載は、契丹小字資料（1053-1175 年）に見られる借用漢語音の表記から、止摂荘・章組摩擦音において母音の拗音性は消失していたと考える。また 2020 年の連載で論じられた入声韻尾の状況と今回の止摂歯音の状況から、契丹文字で表記された漢字音には少なくとも二つの層があることを指摘する。鋤田智彦「『清書対音協字』における漢字音(2)」（『アルテスリベラレス』108）は満州文字資料『清書対音協字』（17 世紀後半から末の刊行）の韻母表記に見られる特徴について、明代の韻書『合併字学集韻』や『西儒耳目資』、また現代北京語および他の現代諸方言と対照させて論じる。それによると当該資料には北京音および南京音的特徴が反映しているが、一部の入声字については呉方言的な表記も見られる。蒋垂東「『麤幼略記』所記唐音の声類について（中古音分紐表）」（『言語と文化』33）は唐話資料『麤幼略記』に記された二種類の唐音（福州音と南京音）に見られる声母面の特徴について考察する。他に対音資料を扱った文献学的研究として、古屋昭弘「『賓主問答私擬』訳注」（『人文研究』203）、更科慎一「ウイグル語学習書としての『高昌館来文』の性質について」（『異文化研究』15）、田野村忠温「『唉咭唎国訳語』の編纂者と編纂過程：中国最初の英語辞典の分析」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』61）がある。

韻学関係では富平美波「『續通志』「七音略」の「門法解」について」（『山口大学文学会志』71）がある。『通志』の続編として清代に編纂された『續通志』に収録される「七音略」の「門法解」について、特に門法に対する独自の見解が表明されている「臣等謹案」の記述に注目し、そこに見られる特徴について考察する。（橋本貴子）

二、文字・訓詁

書籍では、前掲『漢字を使った文化はどう広がっていったのか』が大西克也「漢字の誕生と変遷―甲骨から近年発見の中国先秦・漢代簡牘まで」、荒川慎太郎「疑似漢字」、遠藤織枝「中国の女書」等を収録し、漢字や漢字と関わりの深い文字についての概説を簡要に提示する。

論文では、文字とそれが表す語との関係に着目した文字論的観点からの研究が注目される。松江崇「古代中国語における漢字の表語現象の諸相」（加藤重広・岡墻裕剛編『日本語文字論の挑戦―表記・文字・文献を考えるための 17 章』勉誠出版）では、表語文字としての漢字の性質やそれに関連する諸問題をまず取り上げる。具体的には、①象形字や指事字などの表意字であっても、歴史的変化の中で、字形が「規則」によって意味と結びつく度合いが高まってきたこと、②形声字増加の背景には表語機能を強化するという動機があったこと、③表音字が元々表していた別の語の意味の影響を受けてしまうこと、といった現象が紹介される。そしてその上で、本来は音訳専用字として外来語語形の一部を示していた「閖」という文字が固有の意味を持つようになる、すなわち「閖」が表語機能を獲得していくプロセスが検討される。戸内俊介「「不」はなぜ「弗」と發音されるのか―上中古中國語の否定詞「不」「弗」の變遷―」（『漢字文化研究』11）では、「不」が「弗」の字音を有することになった要因の 1 つとして、近年

の古文字研究で注目を集める訓読（同義換読）を挙げている。前漢・昭帝の避諱によって「弗」が「不」に書き換えられたことで「不」が「不」と「弗」の2語を表すようになる、すなわち「不」と「弗」の間に訓読（同義換読）が生じ、最終的に「弗」の字音を「不」が獲得したと推定する。李筱婷「「對」「答」の使用とその變遷について～出土資料を中心に～」（『東京』）は、「對」「答」は表記の違いではなく同義語の関係であるとした上で、西周から春秋時代まではほぼ「對」のみが用いられる一方、戦国時代の多くの資料では「答」のみを用いるが、秦漢時代に入ると「對」が復活し、両者に意味の分化が生じたことを指摘する。しかしその機能分担は公的な文書に限られ、それが続いた期間も長くはなく、やがて〈こたえる〉という意味を表す語は「答」に固定化されていったという。松江氏の上掲論文が指摘するように、こうした字形と語との関係に対する動態的な研究は、今後さらなる進展が期待される。

福田哲之「戦国竹書の用字・書法と書写者：清華簡『邦家之政』を中心として」（『中国研究集刊』67）は、清華簡『邦家之政』について、その用字は楚系と概ね合致する一方、書法（文字の書き方）には晋系との緊密な共通性が認められるという、戦国竹書の中でも特異なテキストであることを指摘する。そして清華簡『邦家之政』は在楚の晋人が楚系の用字に従いつつ、自らが習得していた晋系の書法によって書写したものであると推測する。近年、地域的・時代的要因による「楚系簡帛」内部の複雑な様相が明らかにされつつあるが、テキストの流通や書写文化の実態を明らかにしていく上でもこうした研究は重要である。

字書・訓詁書に関する論考としては、苗壮「古注本『蒼頡篇』考」（『東京』）がある。訓詁形式の文章で古文献に引用されている『蒼頡篇』なる書物「古注本『蒼頡篇』」は、これまで多くの研究では郭璞の『三蒼注』であるとされてきた。しかし本論文は両者が別のものであるとし、「古注本『蒼頡篇』」は新旧『唐書』等に書名の見える杜林『蒼頡訓詁』であり、それは本来の杜林『蒼頡訓詁』に揚雄『蒼頡訓纂』が取り込まれ、さらに反切が付されたものが東晋のころに定型化したものであるという。出土本『蒼頡篇』を活用しつつ、伝世文献に散りばめられた逸文を丹念に収集し分析を加えることにより、新たな見解を提示している。

この他、出土資料のデジタルアーカイブの現状・課題と今後の方向性について論じたものとして片倉峻平「新規「新出土資料デジタルアーカイブ」の課題と提案」（『日本漢字學會報』3）がある。また『漢字學研究』9には「古文字學研究文獻提要」や「古文字學論著目」が収録されており、非常に有用である。

最後に、出土資料の訳注には小寺敦「清華簡『越公其事』譯注」（『東洋文化研究所紀要』178）、柏倉優一「包山文書簡譯注」（『中國出土資料研究』25）、および『漢字學研究』9所収の「金文通解」等があり、基礎的な研究も引き続き活発に行われている。

（宮島和也）

三、文法・語彙（上中古）

論文でまず取りあげたいのは、大西克也「**上古汉语“有”字存在句及其时间性质**」

（耿振生・陈燕・孙玉文主编《语苑探赜：庆祝唐作藩教授九秩华诞文集》商务印书馆）である。この論文は、氏が「从“领有”到“空间存在”—上古汉语“有”字句的发展过程」（《历史语言学研究》4、2011）において提唱した「空間存在文」（実在的な特定の空間に不定の実体が存在していることを表す）と「所有文」（人やモノあるいはモノとモノの間に恒常的な関係が存在することを表す）の区別に基づき、上古漢語において時間詞が文頭に位置する“有”字文の性質を論じたものである。上古漢語の段階では、実在的な特定の時間に不定の実体が存在していることを表す「時間存在文」がまだ生成されていなかったことを指摘すると同時に、それが後漢以降に、空間から時間へのメタファー写像により、時間詞を連用修飾語にもつ文において時間詞が主語へと再分析された結果生じたものだとの見解を示している。時間存在文と空間存在文の成立の時期の違いにとどまらず、生成プロセスにおける両者の関連性を解明した点でも重要な意義をもつ論文と言えよう。

戸内俊介「殷代汉语时间介词“于”的语法化过程之考察」（《古汉语研究》第3期）は氏の『先秦の機能語の史的発展』（研文出版、2018）第1章に修正を加えたものである。氏は殷代の“于”の時間介詞の用法を考察し、それが「未来時指向」を持つという高嶋謙一“A study of copulas in Shang Chinese”（*The Memories of the Institute of Oriental Culture* 112, 1990）の妥当性を確認した上で、“于”が｛往｝義を持つ移動動詞から時間介詞へと変化するプロセスについて新たな解釈を提示する。すなわち、移動主体がゴール地点に移動するという「空間領域」のイメージが、「自己移動」のメタファーによって時間領域に写像され、未来時指向を持つ時間介詞の用法が派生したとする。移動動詞から未来時をマークする語が派生するという文法化は通言語的に観察され、本論文もその具体例を提供するものである。

市原靖久「『春秋左氏伝』における指示詞の意味と機能」（『東京』）は、『左伝』における上古漢語の指示詞“此”“彼”“是”の機能と性質を、「対話部分」「叙述部分」という文体の区別を重視しつつ考察したものである。そして“此”と“彼”は典型的には直示用法を持つ指示詞であり、“此”は主に話し手を中心とする deictic center から近い事物・時点・空間を指示し、“彼”は話し手（及び聞き手）から遠くに存在する事物を指示すると考える。“此”の照応用法や“彼”の「共有知識」を指示する用法もみられるが、例えば後者では、現実世界に指示対象となる人物が実体として存在するなど、典型的な直示用法との共通性が見出されると言う。一方、“是”は典型的には照応に用いられ、文脈全体から推論される事態を指し、直示用法であっても、指示対象は解釈を必要とする抽象的な事態であるとする。本研究は、上古漢語の指示詞体系における各指示詞の機能分担を究明していくための重要な視点を提供するものと言えよう。

三村一貴「上古漢語の接続詞「故」の談話機能とその特徴」（『東京』）は“故”の基本的な機能を「前件が成り立つことを前提に、そこから帰結を導出すること」と規定し、その導出の方式を「垂直的導出」と「隣接的導出」に分類する。前者の“故”は前件から後件を直接論理的に導出するものであり、因果関係を表す文法機能のほか、対話者を説得する談話機能を持つ一方、後者の“故”は共通の話題や平行的構造を有する段落を

導出するものであり、議論を展開する談話機能を備えることなどを指摘する。そして先行研究で「転題」とされる用法であっても、巨視的にみれば、**“故”**が結びつける前後の段落が共通の話題を持っていることを強調し、本論文の観点の独自性を確認する。三村氏の知見は、接続詞研究のみならず、上古漢語における談話展開を考える上でも大いに参考になる。

以下、文献資料の訳注を取りあげる。渡邉義浩『論語集解』上・下（早稲田大学出版部）は、本文ばかりでなく何晏の集解をも日本語に訳しており、『論語』を扱う際の参考になる。六度集経研究会『全訳 六度集経―仏の前世物語』（法藏館）は、中古漢語の重要な資料である『六度集経』の全巻を初めて現代日本語に訳したものであり、豊富なコラムも有用である。そのうち松江崇「文法・語彙史からみた『六度集経』」は、『六度集経』の言語が三世紀の江南方言を反映することを指摘している。この他、山田大輔「仏教漢文を読む（五）―失訳『雑譬喩経』巻上校注訓訳稿」（『火輪』42）は中古資料として重要な『雑譬喩経』に訓読・現代日本語訳を加えるとともに、漢語史の観点から注釈を加えたものである。（楊　安娜）

四、文法・語彙（近代）

ここでは民国期までの資料を対象とする研究について概観する。沈国威・奥村佳代子編『内田慶市教授退職記念論文集　文化交渉と言語接触』（東方書店）は近代中国語とその周縁の言語文化交渉に関する 27 本の論考を収め、扱う資料は白話、満漢、域外（朝鮮、唐話、泰西等）を網羅する。冒頭の内田慶市「**文化交涉学与语言接触研究**」は 17 ～ 19 世紀の西洋人の漢語・官話・北京語・品詞・文体研究を例に、近代中国語研究における域外資料の有用性を指摘し、研究への姿勢も「あれもこれも」であるべきと強調する。千葉謙悟「**加州大学柏克莱分校傅兰雅文库藏《意拾喻言》及其语言特征**」は、フライヤー文庫蔵イソップ寓話が R. トーム《**意拾喻言**》の白話版本の一種で 1860 年代の成書と推定し、本文が北京語特有の特徴を有すること、非動態助詞**“拉”**を有することから当時すでに非動態助詞を［la］或いは［lə］と読む変化が生じていた可能性を指摘する。木津祐子「唐話による医学書『三折肱』における馮夢龍『醒世恆言』受容」は、唐通事による官話教材『三折肱』が、唐通事の職掌の重要任務である医事通訳のスキル向上を目的に、『醒世恆言』の物語をベースに話本小説の構成で編まれた逸話集であり、作者が原文の白話を官話の文体に改編し得た高い官話運用能力を有していたと指摘する。田野村忠温「「啤酒」の謎の解－この不可解な名称の成立過程」は近代の翻訳語**“啤酒”**が上海語で無気音の**“［bi］酒”**の発音を表す**“皮酒”**の北京方言による読みであり、表記の**“啤酒”**は広東語以来の伝統を継承したとする。

近代の翻訳語について『中国語学』268 も 2 篇の特集論文を掲載する。そのうち荒川清秀「日中同形語を歴史的に考える―江戸の蘭学文献を史料に」は、日中同形漢字語生成のプロセスを遡ると江戸時代の蘭語学の翻訳書に現代中国語と共通する翻訳語が多数あることを指摘し、中国語研究者が現代中国語を研究する場合も、江戸時代以来の中国語受容或いは学習のプロセスにまで通時的に目を配る姿勢の重要性を説いている。近代

日本の漢語教科書では、楊璇「金国璞の北京語教科書における起点介詞の使用：『児女英雄伝』との比較 」（『語学教育研究論叢』38）が、金国璞が1898年から1911年に著した北京語教科書の起点介詞には、“从”から“解”への変化に代表されるような置き換わりがあったことを指摘する。山田忠司「再び北京語“給”について」（前掲『文化交渉と言語接触』）も同時代の『北京官話全編』が課本ゆえに普遍的ではない処置標識の“給”を本文から排除する傾向があるとする。

資料の翻字・影印等も多数刊行された。竹越孝「五巻本『庸言知旨』校注(3)」（『神戸外大論叢』73(3)）は、満漢合璧の満洲語教材『庸言知旨』の現存諸本を校合したもので、満洲文字のローマ字転写と逐語訳、漢字部分の翻字からなる。竹越孝・斉燦・余雅婷・陳暁『満漢合璧版『古新聖經』の研究』（好文出版）は、1800年前後に活躍したイエズス会士ポワロによる満漢合璧版聖書『古新聖經』のローマ字転写、満漢両語の語彙索引と4篇の論考を収める。陳暁「Poirot『古新聖經』とSchereschewsky『舊約全書』との比較－その言語の様相を中心に」（『中国語研究』63）は、この満漢合璧版『古新聖經』が方向を表す介詞“望”を一貫して用いており、訳者ポワロが口語重視の方針により北京の口語に基づく傾向があったとする。永井崇弘・塩山正純編『ラサール訳『嘉音遵口罵口挑菩薩之語』―研究と影印・翻刻―』（愛知大学国研叢書第4期第5冊、あるむ）は、中国域外（インド）における聖書全編漢訳の源流となるラサール訳マタイの福音書稿本の影印、翻字、語彙索引、音訳語対照表を収め、解題では同稿本の漢訳で英語由来の音訳語が多数を占めることを指摘する。内田慶市『『造洋飯書』の研究：解題と影印』（関西大学出版部）は、19世紀に西洋料理レシピという異文化を初めて中国語で著した『造洋飯書』と後続書『西法食譜』の影印資料である。

本土資料では、大島吉郎「『新刻官音彙解釋義音註』（乾隆十三年重鐫本）の言語的特徴について」（『外国語学研究』23）は、同書が福建の下中級官吏を中心とする識字層を対象に官話の常用表現を集めた教科書であり、大量に掲出された形容詞の重ね型が、官吏が官話を使用して様々な事象を具体的に描写するための有用な言語形式であった可能性を指摘する。千野万里子「叶圣陶の言語について(4)：書き換え作業と普通話，使役・受身表現を中心に」（『杏林大学外国語学部紀要』33）は、下江官話の作品《稻草人》の普通話への修正を論じ、修正前に使役の用法のみであった“让”が修正後に使役・受身双方で用いられているのは、言語の標準化志向、地域性の排除であり、普通話への接近の特徴を表すものであるとする。（塩山正純）

五、文法・語彙（現代）

2021年の文法・語彙（現代）分野については、まず『中国語学』268号の掲載論文が皆無であった点に言及せざるを得ない。同誌267号、268号の「彙報」に拠ると、268号の投稿総数は12本であり前号から半減しており、各分野の投稿数が全体として減少したものと推察される。とは言え、オンライン開催による同年の日本中国語学会（全国大会）では、当該分野の分科会での発表者数は全体の半数に迫り、決して会員による研究自体が停滞しているわけではない。

以下、他の学術誌や単行本の収録論文を、語彙論、文法論の順に概観し、最後に翻訳書を取り上げる。

語彙研究では、考察対象の素材に特色を持つ論考が複数見られた。ここでは『日中語彙研究』10の3篇を取り上げる。中西千香「ゴミの名前―「ゴミ」になるときにつく成分―」は、ゴミ分別用のアプリや手引書、知育玩具等で使われる「ゴミ」の表現を考察し、事物が「ゴミ」扱いされる際、多くの名詞に「ゴミ」のマーカーとなる形態素や修飾成分が伴うことを指摘する。併せて、当該成分の語義や名詞とのコロケーションに照らして「ゴミ」認定の基準について分析を加えながら（「茶」や「漢方薬」であれば**“茶叶渣”**、**“中药药渣”**における**“渣”**がマーカーであり、使用後の「カス」、「ガラ」がゴミ扱いされる）、生活実態に根差したゴミのカテゴリ化の様相を概観する。千野真一「中国の公共広告に見られる言語表現について」は、新型コロナウィルス感染症対策のための「公共広告映像」を題材に、その言語表現の特徴を考察する。語彙の使用状況、類義表現の区別、語順の違いやテロップと音声による表現効果等、複数の論点を設け、広告映像特有の言語環境を踏まえた分析を提示する。塩山正純「**“光盘行动”**を表現する中国語―《人民网》2013-2020年ニュース記事で象徴的に使用される語句―」は、ニュース記事中の**“光盘行动”**（完食キャンペーン）に関する表現を考察し、ソフトタッチのプロパガンダとしての当該キャンペーンの性格に着目しながら、食べ残しへの直接的な戒めより暗示的表現が多用される傾向にあることを指摘する。

『現代中国語研究』23掲載の語彙研究のうち、**史有为**「**字母词的再分析与新应对**」は字母語（ローマ字を含む語）について、語構成に与る文字種、省略の有無、由来する言語種等の点からその複雑性を指摘した上で、特に略語における特徴（対応する語の多寡や、語義表示の直接性等）を漢字のみの略語と比較する。さらに中国語における字母語の受容史を概観した上で最新の受容状況に関する問題を指摘し、対応の必要性を説く。**刘中富**「**逆序构词说引发的质疑与思考**」は、「倒置語」（**“菜干”**のようにフレーズの統語規則とは逆の語順により構成される語）の存在を主張する先行研究について、構成成分間の意味関係に対する誤解や、体系的な観点の欠如等、様々な問題を指摘する。その一方で、「倒置語」の有無についての最終的結論を保留しつつ、先行研究や本論のような「倒置語」の存在をめぐる議論自体の意義について、語構成規則とフレーズの統語規則の平行性に関する定説の見直しや、語構成論における多元的研究の活性化に寄与するとして、その有用性を説く。

木村英樹「中国語時間詞の空間性―＜過去＞と＜未来＞の空間メタファー」（嶋田珠巳・鍛治広真編『時間と言語』三省堂）は、時点表現のうち、特に発話時を基点とする直示系時間詞の語彙的特徴に着目した論考である。直示系時間詞の大半に伴う空間領域や空間移動等を表す空間（的）語彙を、水平方向の位置関係を表す横軸系と垂直方向の位置関係を表す縦軸系とに分け（**“前天**（おととい）／**后天**（あさって）**”**は横軸系、**“上个月**（先月）／**下个月**（来月）**”**は縦軸系に該当する）、各系統の語彙の空間性を概観する。さらに、空間メタファーを介して語彙化されたとされる各系統の時間詞についてメタファーの成立動機を考察し、従来説より説得力をもつ解釈として、身体性を基盤

とする空間認識（前方を「見える領域」としてとらえる）に基づく説や、中国語の伝統的な書記形態（縦書き）との関連に着目した説等を提案する。

次に文法論の研究成果を取り上げる。曹德和「表示比喻的“像X似的”再考察」（『現代中国語研究』23）は比喩を表すフレーズ“像X似的”の統語構造について論じる。Xと統語上直接結合する成分は“像”であり、“似的”はその上位の階層で“像X”と結合するという自説について、これを補強する豊富な実例や関連表現の通時的研究成果、音韻論的分析結果、類型論的観点等を新規に導入しながら複合的に論証する。李菲「中国語倒置使役文と関連構文」（『東京大学言語学論集』43）は、「倒置使役文」の一種とされる構文のうち、“一身汗（全身汗だく）”の結果事象を含む表現“V了我一身汗”を主たる考察対象とし、口語データの実例を踏まえて当該構文の構造的、意味特徴や成立基盤について論じる。損害を表す（「奪う系」の）二重目的語構文等との比較を通じ、使役関係を含意する関連構文における当該構文の位置づけを論じる点に独自性が認められる。

井上優「話し手の気持ちとアスペクト形式の選択」（益岡隆志監修、定延利之・高山善行・井上優編『時間と言語―文法研究の新たな可能性を求めて』ひつじ書房）は、日本語と中国語における継続、状況変化を表す形式の使用状況を対照言語学の見地から比較する。「寝る前は降っていなかった雪が現在降っている」という文脈において、中国語話者は俯瞰的な視点から当該の事態を「変化」と捉え、文末助詞を伴う変化の形式（“下雪了”）によりその事態を表現するのに対し、「継続」として捉える日本語話者は継続形式「雪が降っている」を用いる。このように同一の状況において優先される事態把握の相違が、選択される言語形式の相違として現れるとする木村英樹「こと・こころ・ことば」（唐沢かおり・林徹編『人文知１　心と言葉の迷宮』東京大学出版会、2014）に対して、本論文は基本的にこれに同意する立場を示しつつも、同じ文脈において日本語では変化の気持ちの発話を行う場合もあり、その際にも継続形式の使用が可能であるが、中国語ではそれができないことを新たに指摘する。その理由については、テンスを持つ日本語による叙述では「過去→現在→未来」という時間の流れを基盤とすることが関与的である、との解釈を提示する。

最後に翻訳書を取り上げる。小嶋美由紀・李佳梁訳『現代中国語アスペクトの体系的研究』（関西大学出版部）は中国語におけるアスペクトの定義づけや当該分野の枠組みの確立に貢献したとされる戴耀晶《现代汉语时体系统研究》（浙江教育出版社、1997）の訳書である。氏の博士論文を中心に構成された原著に対し、その主張をより正確に理解すべく、訳者注において中国内外における最先端の研究成果を踏まえた上での、丁寧な解説と訳者自身の見解が示される。この訳者注は、戴氏博士論文執筆当時のアスペクト研究の潮流を捉える上でも、高い学術的価値を持つと言えよう。絶版後長らく入手困難な状況が続いた原著が訳書として上梓されたことにより、戴氏の研究成果に対する再評価も期待される。（加納希美）

六、方言

『中国語学』268 に方言音韻史の論文が 2 本掲載された。秋谷裕幸「**晋语吕梁片汾州小片中止摄开口三等知组和蟹摄开口三等知章组读音的形成过程**」は晋語汾州小片の祖音系「原始汾河片」の止摂開口知組・蟹摂開口三等知章組字に非舌尖母音 *i を再建し、『中原音韻』を想起させる分韻状況を復元した。比較方法（comparative method）を北方変種で実践する意義を明確に示す論文が、日本でも公刊された点は注目に値する。なお南方変種での実践例は、同氏の「**原始闽北区方言里的** *ɑi **和** *ɑiŋ」《**语言研究集刊**》2021(2）が中国で発表された。張玥「一八七四年刊『英字入門』に反映した上海語音」は、華人が編纂した最古の英滬対音資料『英字入門』（曹驤 1874）について、書誌情報を紹介する他、英語音転写の方法論について詳述し、さらに、同書の音韻体系が同時代資料の Edkins1869 に比して改新的性格を持つことを明らかにした。百年来の通時的変化が著しい上海語音韻史の基礎研究に新たな一篇が加わった。

方言音韻のその他の論文を挙げる。遠藤光暁「山東方言軽声前変調の地理分布」（『経済研究』13）は、各時代の資料が示す山東方言および周辺に見られる軽声前での独特の変調について、調値変化を通時的かつ言語地理学的に分析した結果、平山久雄（1983、1998）の研究で想定された変化過程が実際にはより複雑だった可能性があるものの、上声と去声では実証され、陽平の変化過程は最初期の記録以前に始まっていた可能性が示された。趙葵欣「Parker（1878）**所记汉口话口语词考释**」（『中国言語文化学研究』10）は Parker「The comparative study of Chinese dialects」の漢口方言 51 語を分析し、当時の保守的音韻特徴および語彙の現代との異同をまとめる。

次に方言文法研究を紹介する。客家語研究には遠藤雅裕「事態アスペクトと台湾海陸客家語の完了相について」（『中央大学論集』42）と田中智子「客家語の発話動詞“vá（話）”“kòng（講）”の文法化について：『客家社会生活対話』における出現頻度の違い」（関西国際大学『研究紀要』22）が挙げられる。前者は専用のアスペクト助辞や構文を持たない台湾海陸客家語の完了相を、四階層アスペクト体系など従来のアスペクトの枠組みで捉えることが難しいとしたうえで、基本的アスペクトがアスペクト動詞（動貌動詞）や事態アスペクト（事件類型）によって担われていた上古漢語に、海陸客家語との共通性を見出している。後者は、梅県周辺の客家語に基づくと推定される教科書《客家社會生活對話》（*Conversations chinoises prises sur le vif avec notes grammaticales: Langage Hac-Ka.* Charles Rey,1937）を資料として、発話動詞 vá（話）と kòng（講）の用例や文法化の進度を検証し、さらに、同書の客家語と近縁とされる高雄市美濃区の変種が、大陸からの移住後、“話”に由来すると考えられる va55 をも補文標識として発達させたという仮説を提唱する。宋天鴻「紹興方言の存在表現“V 带”“V 咚”“V 亨”」（関西外国語大学『研究論集』113）は紹興方言における、動作の結果の存在物に関わるダイクシス表現“V 带”、“V 咚”、“V 亨”が、具体物と話し手・聞き手との距離関係と、具体物へのアクセスに対する「制御権」の帰属者という 2 つの基準で使い分けられることを主張する。**张**盛开「**平江方言的尊称后缀“佬”**」（『静言論叢』4）は湖南省の平江方

言における、長幼の別なく指示対象への親しみや尊敬を表わす接尾辞“佬”の使用形式や用法について、自作コーパスに基づく分析や日本語・韓国朝鮮語との対照研究から考察し、加えて“佬”の通時的意味変化についても仮説を提示する。

語用論的研究として、阮振恒「断りストラテジーの広東語とプトンファの方言差研究：親疎関係と上下関係による配慮の視点から」（『立命館言語文化研究』33(1)）は、マカオの広東語母語話者と主に北京市・河北省の普通話母語話者を対象とした断り表現に関する談話完成タスクのアンケート調査を通じ、マカオの広東語母語話者の方が関係の親疎の影響が強い傾向があると述べる。渡邉俊彦「台湾華語の句頭語気助詞「啊」の表現に対する初歩的分析―台湾蘋果日報記事中の会話文「啊你」を例に」（『拓殖大学台湾研究』5）は新聞記事中の、音声言語（閩南語および台湾華語）を直接反映することを意図した文章表現においても、句頭語気助詞“啊”が「尋ねる意味の強調」、「突出した感情の表現」に使用されるという調査結果をまとめる。

言語社会学的研究として小田格「中華人民共和国湖南省における方言番組をめぐる政策について」（中央大学『人文研紀要』99）は、90年代半ばの規制にもかかわらず湖南省で方言番組のテレビ放送が続いた事実を、「市場競争下の新たな試み」として当局が是認した結果と捉え、同省の方言番組の審査が緩やかであった可能性を推定する。そして湖南省を「方言番組の制作の容認」という2000年代以降の法令運用の先駆的事例と位置づける。（濱田武志）

七、教育

まず『中教』の清原文代「中国語教育学会第18回全国大会（オンライン大会）報告」に言及したい。2020年上半期は、新型コロナウィルス感染拡大に伴う混乱の中で多くの学会が研究大会の実施を見送っている。その中で、中国語教育学会は2020年6月という早い段階でオンラインによる大会を敢行しており、当該報告では大会開催までの経緯と開催方法が詳細に記されている。オンライン大会およびオンライン授業に関するアンケート調査の結果、大会開催後のふり返り、より便利なツールの紹介等も示されている。2022年現在でこそ当たり前になったオンライン大会だが、全国でも先駆的に開催を実現させ、オンライン大会・オンライン授業のノウハウを共有したことは非常に意義があると言えるだろう。

言語に関する教育研究からは、3篇の論文を取り上げる。うち2篇は、日本語母語話者に特化した中国語教育文法について再考しようとするものである。**张**恒悦「**差比句偏误问题研究**」（『中教』）では、作文とアンケートによる調査から、学生が産出した比較構文の誤用の原因を分析している。分析結果より、多くの誤用は学習者の母語である日本語、もしくは第二言語である英語の干渉に起因することを指摘し、誤用分析の研究成果を教育の現場において活用させることを提案している。これに関連して、**张**恒悦・古川裕「**关于在日汉语教学语法体系的几点思考**」（《**汉语教学学刊**》14）も、日本の中国語教育史を概観した上で、現行の日本の中国語教育および教材が北京語言学院（現・北京語言大学）による教育文法をベースにしており、日本語母語話者の特性が考慮されてい

ないことを指摘する。日本の学習者に多く見られる文法の誤用と、日本語母語話者にとって難しい文法項目の例を挙げ、誤用分析・対照言語学・認知言語学といった多角的な視点を中国語教育の実践に取り入れるべきであると論じている。柳素子「コーパスデータに基づく時間副詞の用法について―“马上”、“立刻”、“立即”を例に―」(『中教』)では、3つの時間副詞をとりあげ、コーパス(北京语言大学 BCC 语料库)を使用して、コレスポンデンス分析から3語の差異について検証している。コーパス頻度に関しては3語それぞれ異なるジャンルに特徴づけられる出現傾向が示され、共起する名詞については“立即”がフォーマルな文脈で多く用いられる名詞と、“马上”、“立刻”がインフォーマルな文脈で多く用いられる名詞と共起しやすいことを報告しており、学習者にも多く出現するジャンルや典型的な用例を示すことで理解をより深めさせることができるのではないかと述べている。

第二言語習得(SLA)研究は、その研究手法から量的研究と質的研究に大きく2分類することができる。量的研究に分類されるものとして、劉驫「中国語発音教育における知覚訓練の効果について―声調、母音、子音を中心に―」(『中教』)では、中国語の声調、母音、子音の知覚に焦点をあてた知覚訓練用教材を開発し、その効果を検証している。調査では1クラスを実験群として知覚訓練を実施し、もう1クラスは統制群として訓練を実施せず、訓練終了後に実施したテストの正解率を t 検定にかけて2群の差を分析した。その結果、相対的に難易度の高い項目において知覚訓練に一定の有用性が確認された。そして知覚訓練用教材の効果を高めるため如何に改良すべきか、教育現場への応用についても言及する。質的研究に該当するものとして、西香織「面接場面における受容型コミュニケーション・ストラテジー―中国語学習者と母語話者を比較して―」(『中教』)では、日本人および韓国人の中上級の中国語学習者と中国語母語話者が「就職模擬面接」の場面で使用する受容型コミュニケーション・ストラテジーを比較調査している。模擬面接とフォローアップ調査の結果から、学習者特有のストラテジーや表現形式と、使用されていたストラテジーの有効性について考察した上で、学習者が自分の欲しい情報を取得するために有効なストラテジーを身につけ、また語用論的能力も養う必要があることを述べている。

世界の言語教育の大きな動きとして、「複言語・複文化主義(plurilingualism and pluriculturalism)」が叫ばれるようになって久しい。西香織・阪堂千津子・池谷尚美「なぜわれわれは中・韓・独三言語連携プロジェクトを続けるのか―複言語主義の中で「連携」の意義を考える―」(『複言語・多言語教育研究』9)では、異なる大学の中国語・韓国語・ドイツ語クラス間で連携プロジェクトを実施し、協働作業を通して自文化および異文化への学習者の「気づき」を促そうとする画期的な試みが記されている。多文化共生社会となりつつある日本での、これからの言語教育のあり方を考えさせられる研究ということができる。

(小川典子)

【付記】『日本中国学会報』第七十二集・第七十三集に掲載された「学界展望(語学)」に誤記がありましたので訂正いたします。第七十二集34頁21行目(誤)笠原直樹(正)

笠川直樹；第七十二集 36 頁 4 行目（誤）維莫余嘉德之説（正）維莫覓余嘉德之説；第七十三集 70 頁 29 行（誤）『赤鳩之集湯之置』（正）『赤鳩之集湯之屋』